大障教ニュース

大阪府立障害児学校教職員組合
大阪市天王寺区東高津町７－１１
府教育会館７０４号
(TEL)6765-8904
(FAX)6765-8905

みんなで考える教育のつどい

子どもの発達の原動力を捉え、支え合う

講演に学び、 分科会で語り合いました

8月26日(日)、「2018大阪の障害児の生活・教育を発展させるために～みんなで考える教育のつどい～」がたかつガーデンで行われました。午前中の全体会に58人(24分会)、午後からの分科会に51人が参加し、講演や実践報告を聴き、教育について大いに語り合いました。

午前は、昨年度講演いただき大好評だった白石正久さん(龍谷大学社会学部)を再びお招きして、「子どもの本当のねがい～障害のある子どもの心に寄り添う～パート2」のテーマで講演いただきました。

講演では、障害のある人々の尊厳と人格発達の権利、発達の原動力と源泉、4歳までの子どもの発達課題のとらえ方などについて、昨年お話された内容を確認しつつ、今の情勢の中で大切にしたいことを白石さんらしい優しい口調で熱く語られました。

発達の 主人公」は子ども　仲間」 あそび」 生活」を大切に

白石さんは昨年度、「『発達』というのは食べるということと同じ」と例え、栄養を取り込まないと大きくはならない前にすすんでいくことはできない。自分の外にあるいろいろなもの(外界)を食べて子どもは発達していく。今年度はそこに言葉を添えて、「発達」や4歳までの子どもたちの発達課題について語りました。

具体的には、「発達要求」は、それぞれの段階にあり、〝何に興味がある〟〝何がほしい〟〝何をしたい〟〝どんな自分になりたいか〟という価値意識を内在させ、子どもなりの価値意識が、対象世界(自然、文化、芸術等)や「仲間」「あそび」と結びつき、発達につながっていく。内的矛盾が原動力となり、さまざまな葛藤や行動となって表現されるが、発達の主人公である子どもは、〝よくなろう〟という思いを抱きながら生きている。だからこそ、一人ではなく、みんなで愛情を持って支え合う中でともに同じ方向を向いて大きな矛盾を乗り越えていくことができると述べました。

講演する白石正久さん

「目に見える結果」ではなく、「そこに至る過程」を大切に

また、若い先生方へ伝えたいこととして、障害のある人々の尊厳と人格発達の権利について、びわこ学園の糸賀一雄さんの『この子らを世の光に』をもとに、発達保障の理念の前史についてふれました。発達保障の理念は、1961年に滋賀県立近江学園で提唱されました。障害児は教育になじまないとして、「就学猶予・免除」として教育上取り扱われていた社会の中で、〝存在こそが生産である〟〝障害のある人々も、外界へ働きかけ、そうして様々な創造をし、自分自身にも働きかけて自己変革していく主体である〟〝「遅れている」「劣っている」のではなく、障害があっても同じ発達の道筋〟のどこかで自己実現への歩みを続けている〟という糸賀さんの言葉をもとに、どんなに重い障害のある子どもたちも、生命と存在の価値を肯定される関係のなかで自らの可能性を学び、それを開花させていく発達への権利をもっているという発達保障の理念を紹介しました。

その上で、白石さんは今回の新学習指導要領において、「態度」が「人間性」という表記に変わっていること、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の明確化の中で幼稚園教育要領に繰り返し出てくる言葉に注目し、例えば、「自立心」「自己肯定感」「自制心」のようなことそのものが目標になってしまう危険性について語りました。〝決して結果を急ぐのではなくそこまでの過程が大切であること〟〝子どもの苦しみ、背負っているものの中に自己肯定感や自立につながるものがある〟〝否定的な事象の中から出てくることがある〟〝(美しい)花を咲かせなくてもよいのではないか〟との言葉や投げかけに、発達の主人公としての子どもの「要求」が軽視され、「できること」の増大が発達とみなされ、効率的で目に見える成果を重視する傾向が強まる現在の教育に改めて考え直す機会となりました。

4分科会 11本のレポートで学び深める

午後からは、4分科会に合計11本のレポートが教員や保護者から報告されました。府立障害児学校の現場からは、平野支援・後藤翔太さん、光陽支援・吉松薫さん、東大阪支援・石井祐耶さん、東淀川支援・大西恭子さん、茨木支援・浅野雄大さん、交野支援・朝田浩司さん、枚方支援・林陽子さん、東大阪支援・杉本琢哉さんのレポートが発表され、各分科会で熱い討論が展開され、夏の終わりにみんなで大いに学びを深めることができました。レポーター・参加者のみなさん本当にありがとうございました。

大障教ホームページアドレス　http://fc06331220171211.web2.blks.jp/　Eメール アドレス : fushoukyou_1@mtb.biglobe.ne.jp

書記局のひとりごと

西日本を中心とした豪雨や、強力な台風21号が列島各地に大きな傷痕を残すなか、北海道で大きな地震が発生しました。最大震度7が観測された厚真町では、大規模な土砂崩れが発生し、多くの住民が犠牲になりました。緑豊かな山の表面が大きくえぐられ、地肌がむき出しになった光景は、揺れのすさまじさを物語っています。北海道で震度7が観測されたのは初めてのことです。

道内の酪農家の中には、停電で搾乳できなくなる状況が広がっています。ある牧場では、乳牛の病気を避けるために発電機を借りて搾乳したものの、加工工場が稼働していないために、泣く泣く生乳を廃棄せざるを得ませんでした。こうした事態は、酪農家個人の責任ではありません。農林水産省による緊急の対策が求められます。

また、停電によって北海道電力泊原発の外部電源が喪失しました。幸い停止中でもあり、非常用電源で緊急に対処されたとはいえ、原発が地震などに極めて不安定で危険な存在だということが、改めて浮き彫りになりました。

地震の翌日に財務省が、来年度予算の概算要求を発表しました。米国政府から高額の武器を購入することなどで軍事費は過去最高となる一方で、来年10月に予定される10％への消費税増税が前提とされていて、被災者はもちろん庶民に新たな増税を押し付ける内容です。国内に約2千の活断層をかかえる日本は、いつどこで大地震が起きても不思議ではありません。台風や豪雨災害も相次ぐなか、あらゆる災害に備え、被害を最小限で食い止めるために役割を果たすことこそ、政治の責任だと言えるでしょう。

国の責任による少人数学級の前進、支援学校・学級の抜本的増設を

すべての子どもたちに ゆきとどいた教育を求める教育全国署名

2018年度 大阪スタート集会

7月11日、「大阪の障害児教育をよくする会」をはじめ、「大阪府立高校30人学級をすすめる会」「大阪市立高校30人学級をすすめる会」「子どもと教育・文化を守る大阪府民会議」「大阪私学助成をすすめる会」の5団体が共同で毎年とりくんでいる、教育全国署名のスタート集会が開催されました。

集会のオープニングでは、大阪市立東高校ジャグリング部の高校生6人が迎えられ、軽快なリズムに乗った巧みな演技を披露して集会を盛り上げてくれました。

教育全国署名が国を動かす力に

開会あいさつを行った「府立高校30人学級をすすめる会」の谷田会長は、教育全国署名30年のあゆみについて触れ、運動の力で国や自治体を動かしてきたことに確信をもって、署名にとりくんでいこうと呼びかけました。

講師の山口妙子さん

続いて、「子どもと教育・文化を守る大阪府民会議」の大瀬良事務局長が基調報告を行い、日本の教育機関への公的財政支出の対GDP比を、「OECD加盟国平均の4．4％まで引き上げれば、就学前から大学までの教育の無償化は可能だ」と述べました。その上で、「教育全国署名をすすめ、子どもたちの学び・成長を社会全体で支えるための大きな世論を形成していこう」と力強く決意を語りました。

来てよかった」と思える懇談会に

記念講演は「子どもの育ちを支えるのは私たち ～父母との共同をすすめましょう～」と題して、山口妙子さん（元東大阪市教員・大阪教育大学非常勤講師）が行いました。

山口さんは、ご自身の小学校教諭としての豊富な経験の中で、父母とともに子どもの育ちを考え、教育活動にとりくみ、教育条件整備についてもいっしょにとりくんできたことを紹介し、子どもたちの成長を確かめ合える場として、クラス懇談会を重視してきたことについて語りました。父母が「懇談会に来てよかった。また来たい」と思えるように、レジュメを準備し、父母と話し合いたいことのポイントを提案するなどの工夫をすることで参加者が増えました。そして、教員の子どもの見方と父母の子どもへの思いを双方向にやりとりする過程で、子ども・父母・教員の距離が縮まり、父母同士のネットワークが広がり、父母の中からもクラス全体で子どもたちを見ていこうという雰囲気が高まり、「安全・安心の学校」につながった経験などを報告しました。

高校生のジャグリングの演技

教育条件整備も父母とともに

山口さんは、転勤先の施設・設備のひどい状況に、教職員組合の運動と合わせて父母にも提起し、いっしょにとりくむ中で教室に網戸や渡り廊下に屋根を設置、家庭科室の水回りやガス設備の改修など、父母との共同で要求を実現してきたと述べました。さらに、小学2年の担任時、「3年生になると35人学級から40人学級になるので1学級あたりの児童数が10人増える」ことを父母に訴え、教育全国署名を学級の父母に呼びかけて広げた経験についても語りました。お願いしたすべての父母が快く引き受け、「署名用紙が足りないのでもっとください」と連絡が入るなど、大きく広がりました。その翌年は、PTA会長からPTAとしてとりくむことが提案され、3000筆を超える署名が集まりました。

子どもの願いを教育行政に届けよう

講演の最後で山口さんは、「30人学級の実現などは、広範な府民のねがい。父母と教職員の双方向の働きかけを大切に、父母と教職員の共同の力を大いに発揮しましょう」と結びました。

多くの大阪の子どもたちは、貧困と格差の広がりに苦しめられ、学ぶ権利を奪われている実態があります。大障教は、こうした状況を改善して教育条件整備を前進させるために、今年も教育全国署名へのご協力を教職員の皆さんに呼びかけます。

分会紹介

第２４回

分会名：守口支援学校分会

分会長：川村芳郎

障害種別：知的障害

児童生徒数：１７６人

どんな分会？：日々の多忙な中でゆっくり顔を合わせてお話できていませんが、仲間と力を合わせて地道にぼちぼち活動中です。 普段集まれていないからこそ4月の新転任者の歓迎会や分会総会などの集まる機会を大切にしています。 また、 毎年恒例の4月のバレーボール大会、 9月のソフトボール大会では未組の先生方が中心になって盛り上げてくれています。 少人数の分会ですが、 いろいろな先生たちとつながって一緒に活動することができる輪が守口分会のよさだと感じています。 これからも仲間を増やし、 子どもたちと教職員みんなの“笑顔”のために力を合わせていきたいと思います！